仮名手本忠臣蔵七段目　祇園一力茶屋の場

竹田出雲、三好松洛、並木千柳らの合作で、元禄１５年（1702）１２月の赤穂浪士討入事件をもとに、多くのフィクションを加えて作られています。初演は寛永元年(1748) ８月、竹本座です。

ここは京都祇園の一力茶屋。大星由良之助（大石内蔵助）は、連日遊蕩（ゆうとう）にふけっています。これは本心なのか、敵を欺くためなのか、味方も敵の斧九太夫もいろいろ探りを入れてきます。けれども、誰もみな由良之助のだらしなさにあきれています。

舞台は、お軽が密書を盗み読みしたことに気づいた由良之助が「そちとの馴染みも浅いのじゃが、三日間、身請けしたいのじゃが、どうじゃ」とお軽に身請けの話をするところから始まります。

お軽は「ヤレヤレ嬉しや嬉しや、この廓に来て半年経つや経たずのうちに、はや身請けされるとは･･･」と有頂天になりますが、身請けの目的はお軽を殺すことでした。

程なく、＜折にいであう平右衛門・・＞の浄瑠璃で、兄の寺岡平右衛門が登場し、妹と思いがけない再会をします。ここからの兄妹のかけ合いが絶妙で、お軽は別れた夫の早野勘平のことを聞き出そうとあせります。いろいろお軽と話してるうちに、平右衛門は由良之助がお軽を殺す気でいることを見抜きます。何としても吉良邸の討ち入りに加わりたかった平右衛門は、自分の手で妹を殺し、その功で討入りの連判に加わろう考えます。「軽、われの命は兄が貰うた！」と斬りかかる兄から、お軽が懐紙を撒きながら逃げる歌舞伎らしい見せ場があり、二人の立ち回りの後、父も夫の勘平も死んだことを聞かされます。絶望したお軽は、兄の平右衛門のために死ぬ覚悟を決めます。

お軽「私が自害したその後で、お役に立ててくだしゃんせ」。平右衛門「よい覚悟じゃ。さあ、今が最後じゃ、観念せよ」という所で、由良之助の「待て平右衛門、早まるな」の声がかかります。由良之助は平右衛門の忠義心を見抜き、床下に潜む斧九太夫を刺させ、平右衛門を連判状の最後に加えるのでした。

この外題は、平右衛門とお軽のやりとりを中心に進行し、平右衛門のセリフの播州弁のほか、杓子を刀のさやにしてお軽に水を飲ませたり、連判状に血判を捺す所作などに、播州歌舞伎ならではの珍しい型が見られます。